

主張性と対人ストレス過程との関連について

○岡野志保¹・尾形明子²

(¹広島国際大学大学院心理科学研究科・²広島大学大学院教育学研究科)

問題と目的

昨今、さまざまなストレスがある中で、対人関係におけるストレスが注目されている(橋本, 1995)。複雑な人間関係を円滑にこなすためには、適切な自己表現が重要である。自己表現の中に「主張性」という概念がある。「主張性」とは、「相手の意思を尊重しながらも、自分の意思を抑えることなく相手に伝えるスキル」としている(相川・藤田, 2005)。このような対処行動は対人的ストレスを軽減すると考える。過去のストレスに関する研究には、Lazarus and Folkman (1984) のストレス過程が知られている。このモデルは、ストレスor、認知的評価、ストレス反応という過程を想定している(坂野, 1995)。つまり、対処行動が行われた結果、どの程度ストレスor→影響しストレス反応へと現れるのかが分かることになる。本研究では、対人的なストレスに焦点を当て、対処行動とされる「主張性」がストレスor、ストレス反応というストレス過程においてどのように影響しているのかを検討することを目的とする。仮説は、「主張性は、対人ストレスを低くさせ、ストレス反応を軽減させる」とする。

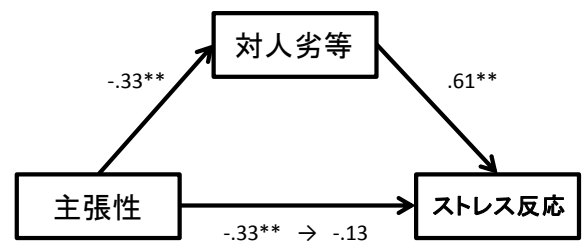
方法

20歳以上のA大学生109名(男性35名, 女性74名, 平均年齢50.8歳, SD=12.4)を対象に、質問紙調査法を行った。質問項目について、主張性は、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度(相川・藤田, 2005)の内主張性の7項目を使用した。ストレスorは、対人ストレスイベント尺度(橋本, 1997)の30項目を使用した。ストレス反応では、鈴木・嶋田・片柳・右馬壺・坂野(1997)のStress Response Scale-18 (SRS-18)の18項目を使用した。質問紙は、A大学の面接授業、特別公開講座の一部を使って配布した。

結果

主張性と対人ストレス、ストレス反応の関連をみるため相関を検討した結果、男性では、主張性と対人ストレス、ストレス反応との相関はみられなかった。女性について、主張性と対人ストレスでは、下位尺度である「対人劣等」と負の相関がみられた

($r=-.3, p<.01$)。続いて、主張性とストレス反応では「ストレス反応」合計得点($r=-.29, p<.05$)、下位尺度である「無気力」($r=-.3, p<.01$)で負の相関がみられ、性別で異なった結果が得られた。そこで、対人ストレス過程における主張性の影響を検討するため、調整効果に性別を入れた調整媒介分析を行った。その結果、女性では、主張性が対人劣等を媒介してストレス反応へ影響する間接効果が得られた(信頼区間95%:-.043~-0.31)が、男性では、その効果が得られなかった。



※表示している係数は標準化係数

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Figure3. 調整媒介分析(女性)

考察

本研究の結果から、対人ストレス過程において主張性は、対人的な劣等意識をもつ場面で発揮され、その結果ストレス反応を軽減させることが分かった。したがって、仮説は支持された。また、Lazarus and Folkman (1984) のモデルに当てはめてみると、対人ストレスイベントはストレスorであり、認知的評価の一次的評価、二次的評価を経た結果、SRS-18で測ったストレス反応が生じると考える。つまり、一次的評価でストレスorを脅威的であると評価しても、二次的評価で対処できると判断すれば、ストレス反応が生じることは少ないと考えられる。したがって、主張性は、二次的評価であるストレスorへの対処可能性の評価に影響するものと考えられる。このことから、主張性は、対人ストレス場面において、劣等感を強く感じたとしても、主張性があれば対処可能だと判断され、ストレスを軽減することが示された。特に女性において、主張性を高めることによって、間接的にストレスを軽減させることが推察されるだろう。